

震災後支援ロードプロジェクト報告（第2弾）

2,011年8月7日～13日

震災後支援第2弾、行ってきました。今回は直接に相談を受ける支援が中心。

8月7日東京での保育士研修（3コマ）を修了して、22時仙台入り。

8月8日～12日までに 保育園と子育て支援センターでの子育て相談と保育園の先生方への保育相談を実施。

お母さんたちの子どもへの心配を聞き、アドバイスとともにオイルマッサージを伝えたり、発達の様子を解説したりする。福島県に祖父母がいるお母さんは震災被害を受けているわけではないが、お盆に帰省することにためらいがあることを辛そうに語られた。

夕方は仙台七夕の最終日を楽しんだ。日本各地からの励ましの七夕が多くあり、またいつもより千羽鶴を使った七夕も目立った。



もともと繊細だった子どもは震災後の不安定が顕著で、オイルセラピーと小児用摩擦鍼の使い方を伝える。

ある保育士は、震災で父親を失っており PTSDなのは分かっているが処方されている薬を飲む気になれず、仕事も続けられないのではないかと悩んでいた。ラベンダーオイルとレメディ、フラッシュバックへの漢方の処方があることを伝える。

保育園では、震災の影響とは言えないが、特に2～3歳児が不安定になっている様子に、少なくとも今は教室がオープンスペースであることは、落ち着かない気持ちを助長するので、遊びコーナーを丁寧に作ることをアドバイスする。

この日、インプロ集団こどら が到着。明日からのインプロワークの打ち合わせも行う。

8月10日 秋保温泉の子ども未来塾

発達障害の子どもさんと保護者、サポーターたちの合宿に参加。

夕食後、バイオリンやオカリナの演奏があった後、インプロショー。「All yes」が基本スタンスのインプロワークに、それまでゲームをしたりマンガを読んだりしていた子どもたちはみな関心を示し、インプロのシーンに飛び入りする。この楽しさがインプロの真骨頂。そういう本質を発達障害の子どもたちは直感で感じとってくれる。

8月11日（月命日）

午前中はインプロワークを13人の大人と青年で体験してもらおう。

パーカッションの即興セッションを皮切りに、川の音や蝉の鳴き声中でのワークショップは保護者の方々にとってはまたとない癒しのひとときだったようだ。

スタッフメンバーと昼食をとりながら振り返り。昼過ぎに秋保を出て東松島を通過して大川小学校へ。

ライトアップニッポンの企画に大川小学校も乗って、今夜花火が上がるように準備してきた保護者の方々がいる。しかし、大川小学校に通じる道の復旧が間に合わず、川沿いの道路にはガードレールも電灯もないまま。校庭は瓦礫の山でもあり、多くの人々がここに集まるのは危険と判断され、花火は中止になったと聞いたのは10日だった。

そもそも、花火の後の暗く静かな校庭を後に家路につく保護者の方はさびしかろうと考えて、花火の後にその場で感じたことを弾いてもらうために即興ピアニストを同行し、九州からアンプやスピーカー、車のシガーソケットから電源をとるためのコンバーターを運び込んでいた私たちだった。花火が上げられないならなおさら、「大川小学校の校庭でささやかな追悼演奏をしよう」と、大川小学校の保護者支援にずっと通っておられるS先生一行とともに大川小学校に向かった。校歌の楽譜を手に入れてほしいというピアニストの希望も保護者に伝えられた。

大川小学校で待つ（7月にお会いしていた）保護者の方は、「花火を実施できなくてすいません」と泣かれた。私たちは花火を見たくて来たわけではない。むしろ、花火が上がらないこの場をさびしい悲しい場にしたい・・との思いを伝え、演奏をさせていただくことにした。

借りていたレンタカーが禁煙車だったため電源をとるための「シガーソケットがない！」というハプニングもあったが、他の車から電源をとって開始。そこに車が来て、「ネットでここで花火があるとみて東京から来たんですが・・」とのご夫婦。事情を説明して、一緒に演奏を聞いてもらうことにした。

まず校歌の楽譜のコピーが列席者に配られて、ピアニストの歌さんが初見で校歌を弾き始める。校歌というものがこれほど校庭に合うものだと初めて知った瞬間だった。

そのあとS先生のオカリナとキーボードで「アメージング・グレイス」。そして歌さんの演奏。S先生の挨拶や2回目の校歌・・と続く。歌さんにはこの時、子どもたちが元気に歌う声が確かに聞こえたという。校庭や周りの山の木々は、子どもたちの校歌を歌う声を何十年も聞き続けてきたのだろう。そこからたくさんの子どもの楽しそうな声が響いてきたという。

丁度、正面の山の上に月も出て、月光の下の演奏会は神々しくさえあった。

花火より良かったと感じたのは、私たちだけだろうか・・・。



月に向かって大川小学校でキーボードを弾く歌さん

郡部はまだまだガレキ撤去すら済んでいない場所も多い。一方で生活の回復が急がれるところもあり、古い知り合いには被災をまだ知らせていない人や「この程度で被災とは言えない」と気持ちを出せなくなっている人・・・。なかなか立ち直れない自分を責めてしまう人、保育者や看護師・医師などは被災後も支援に明け暮れ、気持ちが自分に戻ってくるのはこれからかもしれない。

次の私の仙台入りは2月24日から。1年目の震災地でどのような支援ができるか、7～8月の活動を元に、これから慎重に組み立てる予定である。宿舎もユースホステルに決めてきた。ホテルにこもってしまうと情報交換が不十分だと思ったからだ。

これからも末長い支援をお願いします。

チャイルドラインもしもしキモチ ロードプロジェクト